



アラン

ノルマンディー人の
プロポV
【2014年8月号】

翻訳：高村昌憲

三十一 二つの勇気 (DEUX COURAGES)

勇気はかなり違った二つの方法で示されますが、それは敵が事物か人間かによって異なります。もしも私が火と戦ったなら、慎重になり、後退し、躊躇し、計算し、時には逃げるかもしれません。炎を変えられないからです。炎は法則どおりに焼き尽くします。もしも私が炎を支配したとするなら、それは現実の力によるものです。現実の科学によるものであり、如何なる幻影でもありません。従って炎と話をしたがつたり、ライオンにびったりくっついて歩く調教師のように、炎の上を歩いたり挑んだりする魔法使いを私たちは笑います。結局のところ消防夫は、少なくとも勇気あることによって有能であり、消防士が言う考えによるものではありません。

ライオンとかハイエナ、あるいは馬たちと共にいる調教師は、既にもう全く同じ存在ではなくなっています。その力は権威に道を譲ります。その態度は行動と同じ位のものを生みます。調教された馬には何も譲歩してはいけないことを誰もが知っています。そして全ての調教された動物たちは、躊躇や恐怖の合図を覚えるのが一番苦手であることを認めなければなりません。調教師たちが心得ている能力は、彼らの視線で行動を起こす催眠術のようなものではなくて、動物たちの吠え声や威嚇に動揺しない平静さと確かさです。野獣は人が逃げ出すと襲って来ます。逃亡は既に最初の成功なのです。

これらの権威についての考え方は、戦争においても顕著です。敵対する二つの国が一層膠着してくれば、それだけ益々気がかりです。戦争の原則は、話された言葉とか身振りで演じられた言葉の中にあります。それによって確かな信念を敵国に与えようとしているのです。無敵の人間がいるとはもう誰も信じません。しかし、もしも私が全然恐くないと分かったとしても、或る一人の人間はそれでもほんの僅かな瞬間に、無敵であると私に思わせることがあります。そしてこの種の信念による最初の効果は、私が武器を放棄するとか、あるいは自信を失ってその言葉を利用するとかします。従って敵がそれを信じたり、私にそれを信じさせてことが終わるのは危険を負うことになります。それ故に敢えて言うなら、言葉を雄弁に利用しない勇気は、人間たちに対して決して十分ではなく、動物たちに対しても十分ではありません。存在するだけでは決して十分ではありません。やはり見せなければなりません。恐れていないと思わせること、そして他人を恐れさせることが、征服のための戦争の目的であるのは確かです。その時は皆殺しにする前に、平和の方が有利になる印が付けられることに期待します。しかし、恐らくこの要素は全面的に、防衛のための戦争では重要でなくなるでしょう。そこでは何よりも敵を殺すことを意図します。消防夫が火を消す時に殆ど似ています。

(一九一三年五月五日)

三十二 貴族と労働者 (COURTISANS ET TRAVAILLEURS)

二種類の刈り取る人がおります。一方は畑を刈り取る人です。彼は自然の事物に従って働くのであり、自分の欲望に従うものではありません。というのも事物は耳が聞こえませぬし、心も無いからです。勿論それに反して状況が同じであるなら、それは同じ方法で何時も反応します。そして、優れている者は最も良く両眼を拭って見る者です。情熱に基づいて行動を決めて行かない者です。英知や進歩というものは、事物についての計画によって齎されます。そこでは本当の意志が鍛えられます。平然とした敵を前にして、本当の勇気が鍛えられます。

もう一方の刈り取る人は、人間を作り上げます。それは他人の収穫物の一部を、自分のために使うことにあります。時々コーヒーのテーブルに二人の人間がいるのを見ますが、一人は重要人物です。少し眠ったような感じで非常に閉鎖的です。もう一人は趣味の悪い羽毛を良く着飾っていますが、大変な饒舌家です。一人のポケットにはチップ用の百スー硬貨が入っています。彼は、会話で困難に打ち勝つことが重要です。要約して言うなら、そこでの仕事は全ての人々が気に入られるように生活することです。そして彼は全く別種の刈り取る人です。悪賢く、柔軟で、沢山の人脉を持っていますが、確実なものはありません。何故なら何でも可能であるからです。それは奇跡でしかありません。従って何でも祈ります。欲望は邪魔にならず利用します。というのも欲望はその特権をおべっか使いに与えているからです。

オーギュスト・コントが心底から注目したことは、乳児期が人間の世界においては、少なくとも全てが善意によって支配されて生きていることです。そして彼は人間社会の長い幼年時代が、この同じ法則に従っていることをつけ加えています。人間たちは先ず、人間よりも有益なものは何も見付けません。人間よりも有害なものも見付けません。従って雄弁は最高の物理学でした。それは言うことが真実で、祈りは労働であるという現代の格言とは逆です。相変わらずのこの教育は、事物についての奇妙な観念によって生まれます。というのも人間世界の不安定な法則に従って、祈りとか脅威が先ずそれらを扱っているからです。そして、魔法の言葉を薬につけ加える習慣はその儘残されています。一言で言えば全てが宗教です。宗教は、人が自然に人間たちを扱うように、事物を扱っているのです。

そして既に今日では、多くの人間が少なくとも人間の刈り取りを行っております。精神の奇妙な習慣を作っているのです。何故なら事物についての行動は上手に教えているからです。しかし、人間についての行動は教えるのが下手であるからです。情熱が何時も彼らの道を見出します。そして成功と同時に真実が生まれます。もしもあなたが、人間たちは嘘つきで臆病であると決め込んだなら、それが本当になります。この宮廷人の経験は、あなたが正しいことを認めます。重要な人物についての全ての見解はそれを作り上げ、少し手を加えて彫ります。もしも私が或る子供を愚かだと思ったなら、その子供はそうなります。従って私は、人間たちを認識するのを教えた人々の怪しい知識を憎みます。宮廷人の或る老女は、人間たちを知っていますが、彼女においては何時も彼女自身しか知らないのです。というのも彼女は、人間たちを自分が作ったように認識しているからです。それ故に人間たちが何時も取り扱いは受けるのは、まるで人間たちがそう

なることをあなたが望んでいるようなものでした。今では広い意味で、誰もが自分の刈り取りを行っているのです。

(一九一三年五月十七日)

三十三 資本家たちと兵役三年制 (LE BOURGEOIS ET LES TROIS ANS)

穏やかそうな顔をした或るブルジョアが昨日、政治の話を終わらせようとして私に言いました、「恒久的武装は解除しなければならないことを私は認めます。そして戦争が最悪であることもはっきりしています。しかし、結局のところあなたは殺人を禁止することを提案しないのですか。それは、あなただけでは出来ません。フランス国家は、不幸なドイツの悪しき意志によって、殺人という繰り返される脅威の基に存続しています。悲しいかな、私たちは降伏するか否かを討議すべきではありません。そして私たちが十分な武装をしているか否かを知るには、將軍たちの方が私よりももっと良く知っています」。

お分かりのように、この議論の結末は、当初の疑問に答えていません。そして、全てが最も激しい怒りの声で言われていました。その怒りは、これらの意見が私たちに課していたドイツ反対であったのか、これらの意見を検討することを強く主張した私に反対することであったのか、あるいはブルジョアが望んでいたことを考えることさえもなく、話す自由を感じさせていなかった彼自身に反対することであったのか、私が決定出来るものではありません。多くの市民たちが見せられていた激情には、少しはその様なことがあると私は考えます。そしてその怒りは、反動的な意見に極めて自然に従います。恐らく、理性を前にすると弱く感じるようになりますが、独裁者の権力によって力を得ます。

何故なら、これらの話には多くの自己満足があるからです。余りにせっかちでもあるからです。結局のところ反抗的な内容になりますが、全てを受け入れようとします。何故なら余りに反抗的な内容を求めているからです。私は屢々、力に関してのこの種の従順な憎しみにびっくりしています。その気持ちは、大胆な行動が絶頂の時には最悪を齎します。そして実際には勇気がないので。

その要旨は、真実ではあるが極めて単純です。人間の問題を説明していません。殺人は人間の一つの行為です。しかし、穏やかな品行や平和の精神も人間の一つの行為です。この作法に応える観念を持ったドイツ人たちは複雑です。怠惰であるとか頑固な精神を持った者たちが、余りに単純にするのも一つの観念です。寧ろ、我が国を告発し、疑っています。ドイツとフランスの国会議員が集まったベルンの会議が良く理解させてくれたように、ドイツにも平和の集団がフランスと同じようにあります。

特に私が考えなければならないのは、ドイツの多くのブルジョアたちも私のブルジョアとして考えなければならないことです。戦争を支持する党派は、汎ゲルマン主義者たちのように、今でも非常に良く圧制を行う術を知っています。結局、私はフランスのブルジョア一人ひとりと向き合って、ドイツのブルジョアが答えたのと同じ話を引用することが出来ると想像してみます。そして、もしも彼らが始めは賛成したとしても、その後の残りは何になるのでしょうか。二人で二人の平和を作らないのでしょうか。一人のフランス人が一人のドイツ人と一緒に語り合う時に、平和は生まれないのでしょくか。彼らは他人の情熱に加護を何時も求めないのでしょくか。そして彼らが見知らぬ人々の意地悪さに、殆ど全ての人々は会っていないのでしょうか。以上は、

注意して考えなければならない信頼のゲームです。しかしながら一人ひとりが疑うに違いない恐ろしい誤解に付ける薬は、絶対に無いのでしょうか。この批判的状況において、行為や議論の抑制によって、不可欠な用心のための行動に和らげることなく、少なくとも恐怖によって自分の意志を決めるのは勇敢な人間に相応しいのでしょうか。勿論、不動でいる勇気は稀有なものです。

(一九一三年五月二四日)

三十四 軍人精神 (L'ESPRIT MILITAIRE)

陸軍中尉が私に言いました、「あなたは殆ど公の場から逃れていますし、軍事問題を直接把握していません。私に何か出来るとするなら、そのことをあなたに言いたいと思います。何よりも私が望んでいないことは、私たちが世論の番人と見做されることです。政権は変わります。進歩主義的教義と急進的教義の間で、私は上手に選択したいと思います。しかしそれでも私が二つのうち一方を奨励するようなことを余りはつきりとは言いません。新大臣はもう一方の教義を奨励するために、私を当てにするまでです。そして私は、自分が社会主義を反駁するとは見ていません。私は社会主義者ではありませんが、私がこれと同じ考えを言って上等兵や兵士の前で、恐らく指揮を執って論証するには、その理屈は余りに力がありません。「騎兵隊は右へ、自由に撃て!」。道具は使い尽くしてはいけません。

更に、私はまだ他のことも言います。それは監獄に入れることが出来る者が、なお奨励しに来ることは立派ではないということです。もしも私が証明したいのなら、武器ではなく証拠を示さなければなりません。もしも私が強制するなら、証拠でなく力づくでやります。力づくでやるのと同時に奨励するのは、銜学者の匂いがします。しかしもっと簡単に言うなら、それらが混じり合えば、力が議論され証拠が嫌われます。悪人がはびこります。

従って私は、世論を知らないでいたいとあなたに言います。それは世論に敬意を表する私の方法です。私が持っている耳は、世論であるものが聞こえない耳でもあります。沈黙が命じられている時に音を立てる者たちを私は罰します。しかし、その言葉の中で私が罰するのは、単に噂であり騒音です。私の考えに賛成か反対か、そんなことは構いません。私の考えは私でしかありません。私の金モールは、全く別のことを表しています。

行動です。そこには私のなすべきことがあります。そこには私の主軸となる思想があります。私たちには兵士の道徳教育が負わされていると言われていています。私はそれを否定しません。しかし、私たちは行為する道徳の部分に正確に教えるのです。決して討議したり裁くことではありません。誰にでも自分の仕事があります。目的や規定のために、単に難しいと思いつつも同じ行動を取るのも正しいことです。そこから人が乗り越えるのは、恐怖、疲労、自分自身の自己満足、思い上がりです。時には臆病という共犯者です。既に、より緊急な危険やより恐るべき証拠があるという見通しを持って真面目に仕事を行う時、幾つもの考えが生まれます。それらは同意するものか、同意しないものか、そんなことは殆ど構いません。それらは生まれるのです。それが全てです。

以下に述べるのは私の本心です。私は、同意すればする程頑張りません。私はそれを愛しません。私が気に入る世論に変えることは、秩序を理解していないのです。私は邪魔な荷物のようにそこに置くように命じます。なすべき行動を理解せよ。そしてそれを行え。それが兵士の精神です。そんな風に自分を単純化するのを覚えない人間は、実を言えば人間ではありません。消防士の隊長は、火事を消さなければならないことを証明する必要がありません。彼がなすべきことは消火することです。

もっと良いものを馴らして置ける世論が今、他にあるのでしょうか。私はあなたに、この問題に疑問を持っていることをこれから言います。何でも馬鹿にする精神を私は心配します。しかし、私は何かを肯定し主張する者たちが全て好きです。彼らには力がありますし、それは重要なことです。良く主張する者は、良く服従します。彼は、思考する時には思考することに全てを捧げますし、行動する時も行動することに全てを捧げます。私は、少しの思考を信用しません。人は虱よりも冠を、もっと容易に頭に乗せます。出来ることなら私の言うことを理解して下さい。そしてそれを形にして下さい。政府が敵を罰するためには、決して私たちの後に隠れてはならないことを理解して貰いたいのが全てです。そんなことは政府に相応しいことではないように見えます。私は断言するのですが、そんなことは私たちにも相応しいことではありません」。

この話を修正する理由があるでしょうか。

(一九一三年五月二六日)

三十五 蟻地獄 (LE FOURMI-LION)

私は、ウスバカゲロウの穴である蟻地獄を観察しました。それまで本で知っているだけでしたが、思っていたとおりでした。実を言えば、私は決して信じていませんでした。しかし、卵の先端のような小さな漏斗（じょうご）になった乾いた砂の中を、誰かが私に見せてくれました。一匹の蟻が押されて最初は少しばかり崩れ落ちましたが、底の方へ引っばられて行きました。その蟻は時々体の中央を直ぐに捕らえられ、少しずつ砂の中へ引っばり込まれます。しかし大抵の場合、再び上がろうとしますが、何時も小さな砂の雪崩を引き起こします。全く脆い稜線になっている火口の端に辿り着くのは特別な時だけです。それ故にその小さな火山は底で爆発して、砂を噴出したように放ちますが、それを説明したくても何も眼に入りません。この微小な砂利の雨は、円形闘技場のあちらこちらに再び落下します。蟻の上に一回であつたり何回かであつたりしても、殆ど何時も蟻自身に落下し、最後には埋没します。まるでその力は、先程蟻を砲撃して、今大地の下へ引っばり込んでいたかのようです。しかし私がその時見たのは、砂の小さな噴出によって、反対に蟻を外へ放り投げていました。惨劇は何時もそのように終わると言われていますが、私はそれを見ませんでした。空っぽになった蟻の残骸が、砂に放り出されて再び落下して来るのと同時に、勢い良く外へ放り出される時が来るのです。そして、それらの全ての活動は、重力の影響によって、その漏斗の形と傾斜を持ち続けることにあります。

もしも砂の中を掘り返したなら、苦勞することもなく砂の色をした太った虱のような物を発見します。それはヘーゼルナッツの大きさをしていて、非常に長くて堅い二本の触手を持ち、吸入口器を備えていて、頭は大変に良く動きます。本に書いてあることによれば、それは蜻蛉の幼虫で、変態は六月に行われるということです。

私は、知ることが出来た詳細な事柄に固執しました。何故ならこの蟻の罟は、動物の素晴らしい産業のような営みを屢々見せてくれる最高の機械のようであるからです。有名なファーブルは文字通り、神話と言わねばならない理解不足に良く陥りますが、それは意志と明確に立てられた計画を仮定することにあります。自然の最も単純な力や、手探りのメカニズムの結果を目的とする方法です。眼に見える適合の中で発見するものではありませんでした。

従って今の場合、この幼虫は蟻たちが引っかかる考えがあつて、蟻たちのための罟を掘っていると私は決して言いたくありません。この小さな火口での試行は、砂が下方から引き出された時に重力が作ってくれるのであると理解させてくれます。後ずさりして死にかけているその幼虫は、単純に砂を押し返しながらか、お互いに砂の粒の摩擦や重力による落下が、最終的な均衡と形状を頭上の方で生じさせています。その様にして幼虫は、漏斗の底ですっかり身を隠した儘、ついに僅かな気配を感じるようになります。砂が落ちると、幼虫は頭を動かして押し返します。大きな意図をそれに帰す必要もありません。従って幼虫が待ち伏せる時、砂の硬さや重力によって何時も違ったやり方で逃れる餌食は、まさに触手に落ちることになるのが現実です。勿論、最初は僅かな砂が落下しますが、幼虫は払い退けます。そして、その反動の結果は、事物の状態によって屢々獲物を連れて来ます。その産業というものは、挟む道具に落下する物を食べることにあり

ます。

(一九一三年五月二七日)

三十六 児童画 (DESSINS D'ENFANTS)

私は昨日、小学校で行われた児童画展を観ました。大変に良い作品と悪い作品が混在していましたが、そのことは私がかかなり良く言っているアカデミー会員の芸術を確かめることにもなります。これらの小学生たちのデッサン画は、模写画と自由画と装飾模様画の三つが展示されています。

自由画は何も観るべきものがありません。それらは下手な絵です。子供は自己流で描いているようです。思い出、広場の市場、仕事、遊び、結局良く知っている光景に倣って、想像力と結びついている事物を寄せ集めて、感情の力で説明するために描いています。そしてアカデミー会員の芸術作品も本来的に、その本質から言って大変に自由ですが、伝統や従順さから制限されるのを望んでいます。これらの子供たちは、そんなにも古いものを知りません。彼らは空想に没入します。それは真実でもなければ美でもありません。こう言った方が良ければ、時々感動します。それは何時も自然を表しており、想像力という内面の遊びを発見します。要するに心理学です。考えを秩序や手段もなく表し、外部からの秩序に大変制約されなければならない程、それらの考えは瞑想になっています。私は、均衡のないそれらの夢が余り好きではありません。

模写の絵は、もっと多くの興味があります。何故なら、一つの花、魚、貝殻、穂、蕾の付いた小枝としての対象が表現されているからです。そのモチーフは大変に明解で、夢を追い抜いています。そして自然が紙に刻まれ、味を覚えるのに仲介者はなく、仕事を行うにもないので、完璧ではありません。何時も能力が要ります。精神が自然な機能の中で、より良いものを理解させているのです。それは少なくともその痕跡の上で支えながら、先ず実際の事物に従うことにあります。ここに展示された絵の全てが、自然を表しているものです。事物の秩序は何時もそのことを主張しています。それらは実際との同一の観念から、幾つもの作品を抽出しているようなものです。例えば、生き生きとした色彩の海の魚は、紙の上にも三十回ばかり色を刻んでいます。この回数に基づいて二、三点の作品が日本のものと同じ位であるのが分かります。

装飾模様画の絵が一番良いです。何時も装飾模様画の作品は、子供たちによって難なく同じになっていると言えます。何故でしょうか。何故ならテーマがこの時は与えられているからです。皿に載っている六本の花が同じであったり、あるいは十字架や角度をもった線を表したタイルの床のようなものであったりします。あるいは縞模様が同じ形を繰り返しています。あるいは幾つもの六角形の中が分割されている模様様の壁紙のようなものです。ところがテーマのこの均一性や厳格性は、最も自由で変化があつて、素晴らしい独創性を突然に生じさせています。各々の本質は、この共通した様式に従って力強さを表しています。形の選択によって厳密に制限されていますが、思いがけない変化もあります。取分け、色彩によって屢々味わい深いハーモニーが与えられます。満足感で一杯になり、最後には全ての間人が作る秩序によって保たれた靈感が豊かになっています。創作する技術の法則は、遊びの技術に支えられていることを理解する機会でもあります。そして、そのことは何故アカデミー会員が、何時も法則を求めているのかを私に理解させてくれます。何故なら気まぐれな芸術や寄生的生活では、その機会を十分に感受していないから

です。その代わりに職人は、何時も事物の必然性によって十分に規定されております。アカデミー会員が絶望しているのに対して、職人は奴隷を殺して自由を見付けます。何故なら、生まれつき自由であるからです。

(一九一三年五月三十一日)

三十七 ブルジョア、職人、農民 (BOURGEOIS, OUVRIER, PAYSAN)

我が国にはブルジョア、職人、農民という三つの階層があると私は理解しています。そして多分、秩序の保持の考え方によってそれらは性格付けられます。つまり彼らの通常の労働における必然性として、彼ら自身と結びついた考え方によるものです。

ブルジョアは、人の気に入るための生活で得をします。彼は人間から利益を引き出しますが、事物からは直接引き出しません。書類を手配する銀行家はブルジョアです。上手に商品を陳列する商人もブルジョアです。紛争を鎮め、交渉し、賛同させる知事もブルジョアです。教授もブルジョアです。何故なら、生徒や親を喜ばせる必要があるからです。小学校の教諭も同じです。しかし、二種類のブルジョアがあると言えます。何故なら、国民の子供たちの入学を許可すること、教育することです。これらの意味合いは曖昧です。ブルジョアの精神にとっての最高の作法は礼儀であると私には思えます。ブルジョアたちは、反対する人が余り好きではありません。彼らは礼儀正しく議論します。意見の一致を愛し、節度ある人が好きです。取分け、礼儀を弁えた人が好きです。

職人たちの意見で私が何時もびっくりしたのは、礼儀正しくないということです。そこから彼らがあなたに尋ねたり反駁したりする時、決してあなたに好かれようと気を遣わないのを私は知っています。もしもあなたが感情を害したなら、彼らは馬鹿にします。その様に彼らは、ブルジョアを先ず怒らせます。それは職人たちには、手作業の熟練さによって持っている独立を確実に保持しているからです。短靴の作り方を知っている者は、お金を払う者のご機嫌を取る必要がありません。でも、もっと積極的な別の理由があります。それは彼が、道具と事物で行う者であることです。何故なら、この仕事は全てが礼儀も気まぐれも無いからです。観察して克服しなければならず、敬意や用心は要りません。それは事物との訓練であり、操作であり、そして神々の威信を奪うことです。だんだんと勝利して来るのは英知であり、それは鍛冶家や仕上げ工や運転手のものです。ブルジョアの仕事には奇跡があります。何故なら、話し上手な人はお客を混乱させるからです。労働者の仕事に奇跡は少しも起こりません。ブルジョアのための格言は、「人間は気に入れば、正しくなり得る」です。労働者のための格言は、「人間は知れば、正しくなり得る」です。真の賢者は、偉大な職人です。

農民は、別の性格を持っています。一方では農民は事物を取り扱う者であると言えますし、そのことは農民を現実的にします。それは職人の誇りであり、祈る代わりに行動します。勿論、農民が取り扱う事物には家畜もあり、家畜に対しては一種の雄弁家です。ある時は技術者になり、又ある時は乱暴者になります。その意味では御者は職人よりも農民に近いですが、礼儀正しく生きている面ではブルジョアでもあります。取分け、農民の事物とは大地と雨と太陽です。それらは一体ですが、移り気でもあります。四季は、火とか電気の流れのように、労働には応えません。広大な気象現象は、不規則な姿を現します。従って、雨が降るのを願って祈ります。良く焼き直された鋼鉄を手に入れるために、人は決して祈りません。それ故に農民には、曖昧な多義性がない経験はないので、何時も迷信や宗教的詩を気にしているのは本当のように思われます。従

って、農民は職人が信じているような公平さを容易に信じません。農民は待つことを覚えます。忍耐、それが農民の美徳です。希望、それがブルジョアの美徳です。意志、それが職人の美徳です。

(一九一三年六月十日)

三十八 死者たちは生者たちを支配する（LES MORTS COUVERNENT LES VIVANTS）

「死者たちは生者たちを支配する」。私はオーギュスト・コントのこの言葉を思い出していますが、彼の本当の注釈も一緒に思い出しています。バレスとか、彼の様な人間が高名な実証主義者の教義に私たちを戻したい時、実際には彼の情熱に相応しい長さに縮めているのです。

社会生活は、その人間だけのものではありません。動物の世界では、伝統が全能であると言えます。蜜蜂は何時も同じ計画と法則に従ってやり直しますし、目につく程の進歩は何もありません。その時は、死者たちが生者たちを支配していると言えます。その意味で、死者たちは子孫に蘇り、死者たちに出来る範囲で、同じ人生を再び生きます。もしも人間社会が動物世界を模範にしたなら。一人ひとりの理想は祖先と良く似たものになります。昨日の都市に合わせて、今日の都市を厳密に規制します。彼らとはカトリック教徒でしたし、今でもカトリック教徒であると仮定しましょう。彼らは、聖母マリアへの祈りを言いましたし、今でも言っています。もしも彼らと同じ古い教会の中の同じ椅子にいるなら、彼らのように口を動かし、指を動かしましょう。彼らは戦争に参加しました。今も戦争には参加しましょう。彼らには敵がいましたし、今も同じ敵はいるでしょう。その過去への崇拜は選択の余地はなく、如何なる不敬な判断もしませんが、それはまさしく動物的生活ですし、決して人間の生活ではありません。

人間社会の特性とは、オーギュスト・コントが主観の連続と呼んでいるものです。それから彼は、そこから精神の中の死者崇拜、つまり不滅の力を理解します。ホメロスの客観的な人生は忘れられます。それは三千年の長きに亘って絶えず広がり、豊かになって来た素晴らしい主観的存在と比べれば、その行いと継続期間は大変に僅かなものです。この永遠の人生では若い方のプラトンも既に、神プラトンと呼ばれています。アルキメデスは物理の中で生きています。ヒポクラテスは医学の中です。現実のそれらの社会は死んでいます。王朝は過去のもので、しかし神になった人間の行列が私たちを見守っていて、先に立って先導することさえあります。彼らは本当の祖先です。人類の祖先です。そこには人類の遺産があります。「時計の振り子は過去を増大させるが、静かに未来を調整しているのである」。その意味で人間性が生まれ、個人の空想はだんだんと少なくなっていく。

この精神による伝統とは、進歩でもあります。肉体や動物や本能によって生まれるもう一つの伝統は、特に人間的なものは何もありません。如何に未発達の間も、全ての祖先を忘れずに、風習の教えどおりに構わずに行動します。しかし、その人間は人間性の重さに従って、本当の祖先を選択します。そして本当の崇拜は、何時も選択して言いました。それが真の伝統主義です。何時も進行中であり、何時もより人間的で、祖先の精神は国家に接近します。動物の祖先は、それらを分割してばらばらにします。不公平の伝統は何時も同じ儘です。公平の伝統は豊かになり、強くなります。「人間性とは、既知の存在の中で最も生き生きしている」とオーギュスト・コントは言いました。

（一九一三年六月十二日）

三十九 戦争放棄 (ABANDON À LA GUERRE)

議会は、私たちの政治を全て支配する恐ろしい考えを敢えて表明しようとはしません。一人ひとりはこの公的な場に舞い戻りますが、それは極めて明白です。「私たちには侵略を恐れるのに理由があります。ドイツは私たちの領土の四分の一を併合しようとしており、それは全てが証明しています。武装も戦略上の隊形もそうです。政党は危険に晒されています。この問題は、全ての問題を支配しています。私たちがヨーロッパの地図から消されるか否かを知ることは重要です、云々」。これらの議論から現実の国外問題を前にして示されるのは、一種の精神の拒絶状態です。

ドイツは何時も包囲のことを話します。ドイツ帝国議会の演説を読んで下さい。ドイツは恐るべき同盟の脅威を見ております。ロシアには資源と無敵の忍耐力があり、イギリスには無敵の海軍力があり、フランスには伝説的に勇敢な攻撃と巨額の戦争責任を改める意志があります。以上は、ドイツ人たちが如何に物事を理解しているかです。そして歴史を見れば、軍事的同盟が最良の秩序からは程遠く、ドイツ人たちを助けると見ていません。もっと適切に言うなら、それらの一つであるオーストリアは、スラブ騒乱によって国内的にも弱くなっています。最近の事件によって、東洋に隣接している点でも弱くなっています。これらの状況の中でドイツが、今まで見て来た最も注目すべき軍事的努力によって防衛に備えるのは自然なことです。そして大胆な精神がその下で検討するのは、ドイツの防衛が私たちに大胆な攻撃を示す機会になるのか否か、取分けその時にロシアの不安定な力を無力化させる巧みな交渉となるか否か、そしてイギリスが何時も同盟を保留して慎重であるか否か(1)、が更に理解されます。

それによれば、最近の元首の会談によってフランスの政治がロシアに接近しているのと、イギリスの支援に大変信頼している確信は同じものではなく、祖国の救済が第一なのでしょう。それは多分、騙された政治でしかありません。歴史には幾つもの実例があります。この政治は、戦争を正当化するのが常ですが、やはり莫大なりリスクが伴います。この危険なゲームに私たちの資産がリスクを負う、分別のあるフランス人とは如何なるものでしょうか。

同様に、ドイツ人たちもそんな風には考えておりません。彼らは投げやりです。国外の危険は武装による防衛によってしか避けられないと思っていますし、そのように言っております。彼らは外交活動を無視します。バルカン半島の事件以後(2)、屈辱はないとはいえ、活動的で、慎重になり、公然と平和を望んでいます。この問題は急進的な国の人々を誘惑することになりました。しかし、国内や国外の影響によって、我が国の政治は鎖に繋がれたようです。しかしながら、最初に包囲されて否認された張本人はサント・ペテルスブルクにいました(3)。私たちの外交活動は秘密裏に隠されています。議会は任せっぱなしで、まるでその立場は最早私たち全てに属していないで、関係がないかのようです。恰も戦争推進勢力は自然な勢力で盲目的のようでした。恰も兵役三年制の勢力は全てに応え、全てを防ぐためのようなものでした。その時は、それが戦争の可能性を大きくしているのです。未来に確かなものはありません。

(一九一三年六月十五日)

(1) 一九〇四年の仏・英政治協定は、国としての同盟関係があるとは言えず、如何なる約束も含んでいなかったのである。

(2) 第一次バルカン戦争は、一九一二年十月にバルカン同盟諸国（セルビア、モンテネグロ、ギリシア、ブルガリア）とオスマン帝国の間で勃発した。

(3) サント・ペテルスブルクにいたフランスの代表は、対独強攻策を推進した外務大臣のデルカッセ（一八五二～一九二三）であった。

四十 ホッブスの歌 (LA CHANSON DE HOBBS)

力を高く評価する全ての民衆歌は、牧歌的な声楽曲のベルジュレット (1) である樵の母の本当の歌が私に聞きたい気持ちを起こさせます。以下は、ホッ布斯 (2) を如何に歌ったかです。

人間は、人間のために一匹の狼になります。過去もそうだったし、今もそうであり、未来もそうです。それは本心です。人間を追いかけることは少なくとも、如何にして時代時代の後で宗教で着飾った複雑な芸術になったのかを言わなければなりません。そして以下のようにになります。

二人の人間は一人よりも強く、三人は二人よりも強いです。社会はその様になっています。個人は決して自分だけのものとして国家の安全を見分けることが出来ません。祖国への愛は、一番目の憎しみの創造でした。

群をなしている二つの対等の社会があるとしましょう。最も強い社会は権力が最も集中していて、最も良く服従されています。王位は、二番目の憎しみの創造でした。

しかし、対等の二つの君主制があるとします。一方はもう一方を苦しめるに違いありません。最も弱い社会は、秩序が議論されるものです。何故なら、それは時間を浪費し、個人的慎重さに口実を与えるからです。最も強い社会は信じるものであり、決して調査をしません。宗教は、三番目の憎しみの創造でした。

しかし宗教が対等の、二つの君主制を考えてみて下さい。最も高潔な社会は、最も強いでしょう。そこでの宗教は最も良く情熱を調整する社会であると私は理解します。というのも不品行で、酔っ払って直ぐに喧嘩をする兵士たちは、隊長の眼を逃れて、彼らの中の正義や節度や忍耐強い兵士たちの価値を認めないからです。美德は、四番目の憎しみの創造でした。

しかし美德が対等の、二つの君主制を考えてみて下さい。最も賢明なものは最も強いものです。というのも弓や投げ槍を改良し、火薬や火縄銃や大砲を発明しなければならなかったからです。その次は砲弾と魚雷です。次は飛行船で、次は飛行機です。科学は、五番目の憎しみの創造でした。

しかし賢明さが対等の、二つの君主制を考えてみて下さい。最もお金持ちの人が、最も強いものです。そして経験が分からせてくれたことは、共通財産は余り人間には関心がなく、平等は余り創意工夫を起こさせません。一方では、財産を蓄えるけちな人間を興奮させるには所有権がなければなりません。他方では、贅沢な人間は知性に優れた価値を与えなければなりませんでした。お金持ちは、六番目の憎しみの創造でした。

しかし最もお金持ちで、最も賢明な国家は、宗教がなければ多くの者が非業の死を遂げる危険を負っていました。何故なら、知性が信仰に基づいて考えることなく創意工夫を発展させて行くことは困難であるからです。そして化学者は危険な神学者です。ですから教育が全ての人々に与えられるようになったのです。それは才能を発見するためであり、大物とお金持ちには決して平凡さを導きません。従って科学的精神と平等によって、君主制は真の共和制の中で向きを変えるように脅されました。それは死でした。それ故に、緻密な詭弁家は科学が機械の女王であり、宗教に対して何も出来ないことを力説し、明らかにする能力がなければなりませんでした。でも、

科学に親しむことで大変に先見の明があり、専門化された具脳を作り、それと一緒に政治とか宗教が問題になると小さな子供たちのように考えるのはそんなにも容易ではありませんでした。しかしながら、それをやり遂げるか死ぬかでした。人々はそれをやり遂げました。哲学は、七番目の憎しみの創造でした。

この様に悪魔のような人々の奥底をホッブスは歌いました。しかし本質的なことを一つ忘れていません。それは、そこで言ったことが言うべき全てではなく、真実であっても思考すべき全てではないということです。というのも信仰が有益であると分かるや否や、有益でなくなるからです。『リバイアサン』は、終止符を打った後で直ぐに燃やさなければならなかったようです。

(一九一三年六月二十日)

(1) ベルジュレットは、十八世紀に流行したロココ的な牧歌趣味の軽い調子の声楽曲。

(2) トーマス・ホッブス(一五八八～一六七九)は、イギリスの哲学者・政治思想家で主著の『リバイアサン』を書いた。

(次章へ続く)

四十一 中立 (NEUTRALITÉ)

彼らは叫びます。何故なら、学校では宗教を教えたがらないからです。しかし、もしも彼らが教えるとしたなら、何を言うのでしょうか。というのも神は管理者ではないからです。神は改革者であり、平等主義者です。神とは完璧な審判者であり、騙すことも買収することも不可能です。それは最も崇高な理性であり、情熱はありません。こんな単純な定義をあなたは言おうとするのでしょうか。しかし、まさしく神がいるか否かを知る問題は、小石とか木片を崇めるのでなければ重要なことは沢山ある訳ではありません。私たちは、存在するものとして観念を形づくるだけで十分です。宗教の力というものは迷信を良く見分けて、事実を超える正義の観念なのです。この観念を形づくと、人はそれを信じます。「あなたの治世がやって来たのだ」。これが全ての革命家の祈りです。その治世は正確に言えば、金持ちやアカデミー会員や征服者たちの治世ではありません。詳細を知りたければ、最も良く聞いてくれた司祭の一人であったトルストイを参照して下さい。パリサイ人たち、独善的な人々に用心して下さい。教師が神を愛し始めることを、そんなにも望んではいけません。

あるいはあなたの神が、既成事実や判断を下された事柄の神であることを明瞭に説明して下さい。財産調査を望まないのが神であり、株主にふくれっ面をしたり、「小さな鉱山」を破産させるのを望むのも神です。哀れな人々の労働の利益でシャンゼリゼの劇場を建てたのも神です。パリを分割して、二つの町にしたのも神です。一方は殆ど人がいない公園を見せてくれますし、もう一方は砂浜の砂利のようにしている貧しい子供たちがいる貧弱な小公園です。軍人たちの情熱を讃えるのも神です。隣人愛のために女たちが肩を出して慈善舞踊会を許可するのも神です。国王を即位させたり、ジャンヌを火刑にしたのも神です。城の神や金庫の神もおります。そこにも神はいるのでしょうか。そうです。とあなた言います。諦念は宗教の美德です。

いいえ、違います。そうではありません。買収されない裁判、本当の能力による未来の生活という考え、それだけがこれからあらゆる所で許されているのです。その正義を死後に認めましょう。というのも彼の全てを平均化して、プラトンが言うように全てを裸にした純粋な人間たちを許すのです。死はあらゆる事柄を平均化します。というのも妬みが除かれるからです。しかし、肉体の偉大さへの敬意をも傷付けることしか理解しないのは誰でしょうか。王とは何でしょうか。金持ちとは何でしょうか。偉大な裁判を受ける大臣とは何でしょうか。私は多分従いますが、次の有名な言葉によって従うのです。「私の精神は頭を下げない」。私は誇りと偉大さを他に探します。素晴らしいはしがきで知るのですが、お金は墮落させます。権力は盲目にさせます。労働は清め、貧しさは明るくします。私は事実を否定します。表面的なことを否定します。私は決して金勘定をする人間ではありませんが、真の価値の重さは量る人間です。私は、清廉潔白な裁判であると信じるや否や、私自身を裁きます。最後の裁判は、最初の裁判でもあります。謙遜する人々は既に王座の栄光にあります。

もしも私が、国債や城を三つ持っている右派の人間であったなら、無神論者の気持ちを大変に愛し、何時も金持ちたちと手を結び、体制の保守主義者になっていることでしょう。というのも

野心家というものは、おべっか使いで保守主義者で、国民の裏切り者でもあるからです。しかし私は、大人しく他人に支配されるのを肯定し、軽蔑によって既に力強く、同情によって直ぐに恐い物知らずになる真の信者の諦めを恐れます。

(一九一三年六月二一日)

四十二 急進の話 (DISCOURS AU RADICAL)

真の〈政治家〉は、権限をもった裁判官たちからの称賛を〈急進派〉が求め始めることに気付くや否や、何らかの些細な場所ですぐにその機会を手に入れ、一寸した〈大勝負〉に出ることになります。その政治家は彼に言いました、「私はあなたのことが良く分かりました。あなたは、国民が自分自身で自らを統治せねばならないと強く主張する単純な者ではありません。単純ではない、とあなたは繰り返して言っています。でも、それは全くの見当違いです。あなたの性格と考え方を思いながら、国民は思考し、自分の立場を決める代わりにあなたを信じます。そして私たちと比較すれば、あなたも同じです。あなたは全てを知ることは出来ません。全てを調整したり、決めることも出来ません。彼らはまだまだです。あなたは国民が同盟を準備しているとか交渉していると想像しているのでしょうか。不可能であることをあなたは良く知っています。全ては些細ですが微妙です。あなたは意志を分割出来ません。判断し、契約し、リスクを負うのは何時も一人の人間です。その上で、権力を手に入れている者たちを良く観察して下さい。彼らは最早同一の人間たちではありません。

批判は容易ですが、〈実践〉は困難です。それは殊の外、政治においては一層本当のことです。厳格であることに全ての人は批判的です。弁護士たちはこのことを良く知っています。しかし結局のところは判断しなければなりませんし、決定しなければなりません。戦争のことも、行動しなければならぬと良く言われていました。全ての一連の行動は正しくなります。何故ならそれを生んでいるからです。その代わりに、もしも実行を躊躇したなら、最良の計画も酷いものになります。結局のところ、権力は常に君主制のようなものです。あなたはお分かりです。そうです、あなたはそのことを理解しています。あなたは神殿に這入ります。入場が許されます。それは辛い試練であることを私はあなたに断言します。だがその上で更に、男性の服装をします。自分を捨てなければならぬ諦念、真心、単純化された精神があります。笑うことは終わりです。小舟を押し出さなければなりませんし、岸边は直ぐに離れて遠くになります。他の岸を見なければなりません。しかし、何時もひっくり返り、唸り、身を委ねる者たちの方へ両手を差し出します。そこでの彼らは最終判断されます。代議士に止まっている大臣は、最早これからは決して大臣にならないでしょう。従って本当の野心を働かせていると、信じられない程の勇気が出て来ます。攪むためには手を放さなければなりません。

私が言う意味で十分に素直な政治家は、きちんと物事に合ったことを言いたいと思っています。しかし、それは言うべきではなかったのです。ほんの少しだけ言うことでした。この洗礼や改宗や変容に身を委ねなければなりません。他の人間を忘れなければなりません。貧しい父親と一緒に、彼と行動して下さい。一撃で砕いた方がましです。行われぬ限り、非常に難しいように見えます。しかし、行われるや否や、もう考えません。この素直な友人は時々、審議や議論は行為に先行すると言いたいのです。そして、その様なことは大変に演劇的な様相を呈しています。しかし実際には、真の政治家にとってはそれと反対です。審議は既に、決定されたことを実際に受け入れさせるのを目的にしています。あゝ、あなた、あなたは正当な事由を信用し

ないことを学び、そしてそれは批判に駆り立てるためです。その代わりに批判が弱いなら、隠れた決定がその中で支持を得ます。それは椋鳥を捕るための餌のようなものです。要するに現実に論証することとは既に、譲歩することなのです。もしも権力が、人間を石に変えたメドウサの頭のようなものでなかったなら、最早何ものでもありません。それ故に、私が話している政治家は、一流ではなく二流の政治家で、彼は余りに気に入られたいのです。鞭で打たれる前に、棒に接吻しているのです」。この話が終わって、私たちは急進的になり、人の操る航海を恨んで陸地を歩いたりしません。その小舟の中で、大いに飛躍することを誓っているのです。

(一九一三年六月二三日)

四十三 平和を望むこと (VOULOIR LA PAIX)

平和を望むこと、思い切って平和を望むことが全ての理性ある市民の義務です。あなたは確かに平和を強く望んでいますが、結論は二つなければならぬと怠けて言うてはなりません。この世には殺人者と強盗がいます。遺憾ですがそれに対して防衛することしか出来ない、と言うてはなりません。

真実は、私たちが名誉よりも更にもっと平和であることを、恥ずかしい思いをしても認めることです。民族主義者たちはびっくりするようないじめを見出しました。それは、そんなことを言う者を臆病で卑劣であると見做すことです。そして彼らを見過ごすことで大変に都合が良いとは決して出来ない人間として、悪口を言い、勇気を疑い、速く走らせるように鞭を打つのです。私たちは、リシュリュー時代の近衛騎兵や監視官と殆ど同じ偏見を持っています。それは事件を前にして逃げ出すのは臆病であるという偏見でした。それは、忽ちにして起こり得る喧嘩を見届けないのは臆病であるというものです。例えば、ことを急いでいる人間には決して道を空けません。何故なら、道を空けるのが親切そうであってもその慌ただしきは、恐怖による処と似ていたからです。そして正しい理論によって、狂った若者たちはお互いに叩きのめします。今日のこれらの喧嘩には最早、様式がありませんが、それは希望を与えます。というのも、様式はどんなものにもあるからです。

様式は、私が恥ずかしげもなく礼儀正しいことを今は可能にしています。私はその歩道から降りて、もしも考えが湧けば大変にやる気を出します。もしも私にやって来る人が、若者か老人か、強い人か弱い人か、そのようなことは考えません。彼が私を理解するか否か、ぼんやりしているか無礼であるかも私は問いません。私は、その問題を同一に見ていません。私は、平和が簡単な行為であると断言しますし、誰も悪く解釈しません。

それと同様に、市民の戦争感情が出来上がって進展して行くのと何ら変わりはありません。様式に係わる問題です。というのも何時も礼儀正しい人を臆病者として指差すのが様式であったなら、最早人は礼儀正しくしようと思わなくなるからです。如何なる機会や好機があったとしても、戦争よりも平和を断固として好む人を臆病者で見做す様式がこうして生まれるのです。あゝ、私はこの様な不条理な様式を我慢する必要はないと言います。そうしてそれは、年齢的に直接的な危険から安全な場所に身を置く人々には大変に容易です。平和でいる勇気を自分に与えるために、彼らは次のように言うだけです。「戦争になった場合、最も健康で元気な青年が先頭を歩きます。青年は自分の人生と希望の全てを捧げます。ところで、もしも私が祖国のために叫んだとしたら、彼らよりも年長の私は何をするのでしょうか。私は、大変に勇気があるのを証明するために火の中へそれらを押し進めます」。この考えを自己満足することなく形にしてみてください。その時に、赤い火があなたの正面にあります。熱狂的な愛国者が自殺するのは最高でなくなるや否や、あなたは愛国者の勇気の爆発に実際の臆病を発見します。他人の人生が無造作に犠牲になるのは、決して命令によるものではありません。身内を助けるのも同じです。まして名誉そのものを助けるためでもありません。しかし、愚かな者の眼には彼自身が勇敢と見えるようにす

るために、他の人々を戦うことに導く者を何と言えば良いのでしょうか。

(一九一三年六月二六日)

四十四 真実と善 (LE VRAI ET LE BIEN)

「何よりも〈真実〉である。〈善〉や〈美〉よりも〈真実〉である」。私がこれらのこと、あるいはこれらに近いことを読んだのは、『真理の奉仕者である職人の暦』と題された優れた選集の中でした。私はこれらを読み、最早それ以上前に進めませんでした。何故なら、それは確認されている〈真理〉であり、そして現実存在するものであるからです。人が生み出す〈真理〉もあります。人が望めば存在しますが、望まなければ存在しないものです。

天体の事象にも、はっきりと分かる一つの確実な方法があります。ここでは好きであることは少しも重要ではありません。自然はそれを無視します。一番高い処に達している太陽は、見た目にはその後沈んで行きますが、地球は何時も傾いているのと同時に、自らの軌道を回っているのです。この冷酷な天空は偉大な教訓を教えてください。この光景が私たちの必然性という観念を精神に齎し規制したことは何ら疑えないことです。そして確認して受け入れることを知らないならば、人間ではありません。それは英知の最初でした。しかし直ぐに占星術が生まれ、私たち人間の運命を天体の運動と結びつけ、予想したいと望みました。最初に見た観念は奇妙なものでしたが、それをこの上なく上手く説明するのには事欠きませんでした。というのも人間による事件、制度、芸術、そして宗教でさえも厳密に風土とその時の気候、つまり基本的には最接近している天体に因っている、と今日でも一人ならず何人もの学者が言うからです。雨が深いことは私たちのノルマンディー地方の屋根の形を説明しているように、太陽はギリシアの柱廊を説明しています。その考えに倣って下さい。あなたは、人民の流れは大河の流れのようなものであるという結論に達することになります。要するに、人間社会の秩序においての有為転変も必然的になり、悉皆了知したならば計算も出来ますし、天体の秩序も同じです。従って、あらゆる事象を考慮に入れたなら、理論的には星占いも可能です。

従って彼の話によれば、〈真理の奉仕者〉は寧ろ認識して行為するのを予測するように定められているのです。それらの行為に反対したいのは狂人たちしかおりません。最も賢い者が行動するのは最小限になるでしょう。というのも日食の時に未開人たちは、太陽が解放されるように騒ぎ、そして祈るからです。しかし賢者はストップウォッチを取り出して言います、「これは直ぐに終わる」。そして彼の冷静さは、彼の目から見ると、他の人々の狂気と同じように必然的で自然な行為なのです。

しかし、その側面にいるべき時は、半分の英知しか持っていないのが良く分かります。あるいは、もしもあなたが他の言葉で言いたいのなら、半分は宗教です。誰も知らない預かり物をまさに返そうとしている正直な人間は、次のように言う権利は自分でも認めません。「成るように成るでしょう」。というのも同じ理屈によって、彼は証拠よりも感情の方が何時も大変に強く、証拠を前にして言うからです、「成るように成るでしょう。もしも私が間違えるに違いないとするなら、私は間違えるでしょう。私の間違いは他の人と同じ事実になるでしょうし、私の間違いも真実になるでしょう」。この様にして〈事実の溺愛者〉は、もしも不用心に身を捧げたなら、自分自身を滅ぼすことになるでしょう。ですから、今の真実を崇めることが全てではありません

。そして思考することは、何時も正しく思考することを好みます。そこから神話であっても見抜く力が強いプラトンは、善の思想がその他のあらゆる思想を明るく照らす本当の太陽であると言いました。全ての人間は、動物的な独裁に反対して未来を望み、勇敢にそれを実行しなければなりません。平和を望み、勇気を持ってそれを実行しなければならない、と理解しましょう。

(一九一三年六月二九日)

四十五 政府関係者 (L'ATTACHÉ DE CABINET)

私は昨日、非常に活発で陽気でごく若い政府関係者のド・マスカリイユ氏の訪問を受けました。彼は言いました、「あなたは国内政治に関する見立てをやりに来ませんか。それは私の専門です。全てがもっと良くなりますよ。あなたのような人にはD.R.M.という新しいグループが重要だとは決して言いません」。

「D.R.M.とは何ですか」。

マスカリイユ氏は言いました、「私は大変に合理的で共感を呼ぶ〈絶対的与党代議士会 (D.R.M.)〉というグループのことを話したいのです。会長は昨日も私に言いました (大袈裟な言い方で)。何と善人は大変に心配して、何と悪人は安心していることでしょうか。彼らが身に付けているのは型に嵌まったものです。国には秩序と治安が必要です。私は今ここに沢山の手紙を持っていますが、全てが急進的委員からのものです。公正で清潔で誠実な政治を強化し、保持し、進歩させる政治によって右派と左派を和解させた私たちを称賛するものです」。

私は彼に言いました、「良く分かりました。しかし、私たちには僅かですが、財政面での困難がない訳ではありません」。

マスカリイユ氏は言いました、「何という間違いだろう。悪魔は経済的困難を何処で見ているのでしょうか。資本家が私たちを支えています。事業は進んで行きます。信用が支配しています。議会での十二回もの採決は、紙業者に沢山のお金を稼がせています。あなたはそのことを知らないのですか。以上が私たちフランス人です。悪辣な家畜商人がお金持ちになっています。私たちは石工やラシャ製造業者に感謝されています。銀行家たちは私たちに跪いています。そうです。彼らは私たちに短期の手形を出しますが、更新が出来ます。期日が来るまでは何もすべきではありません。物価は高く、世界中にお金持ちがいるのがその証拠です。結局のところ私たちは、一日に両方の票を獲得します。そうです。そして、その選択が世間をびっくりさせます。そのことを私に言ったのはアカデミー会員です」。

私は彼に言いました、「よろしい。でも国外の政治はどうですか。あなたはそのことで何を考えますか」。

マスカリイユ氏は言いました、「そのことを話すのは、私にとって調子が大変に良いのが分かります。今からでもサパン氏の家へ行って見て下さい。彼は頭を悩まして唸っています」。

サパン氏は全身が黒装束です。実際に大変に細身で、顔も大変蒼白く、白粉を塗っているようでした。マスカリイユ氏は歯をかちかち鳴らしながら私に言いました、「事態は、実際に言われているよりも重大です。会長は昨日、私に繰り返し言いましたが、ドイツの状況はこれ以上危機的なものはないとのことです。東西への脅威や海上への脅威は、最も恐るべき戦争に爆発させるのが得策なのです。そのことが言われて十年になります。しかし我が国の大使たちの報告は、今まで以上に暗いものです。サパン氏は、そのことを良く言って下さい、とつけ加えて言いました。更に、あなたが理解している人々には全て言って下さい、とつけ加えて言いました。彼らはあなたを信じています。あなたは、なくてはならない人です。もう少し働いて痩せて下さい。以

上は、私に言った褒め言葉です。彼が私を会に入れた時、私は虫垂炎を起こしていたことをあなたは知らなければなりません。私は今、高血圧、胃痛、糖尿病、ノイローゼ、不眠症になっています。しかし、この国の国民は気楽です。非常に元気です。少なくともそのことは必要であると説いて下さい。私は既にもう痩せている、と国民に言って下さい」。私は逃げ出しました。これらの全ての病気が決して伝染しないというのは、本当に確かなことなのでしょうか。

(一九一三年七月一日)

老人たちが民主主義を論じていました。一方はプラトンのように意に介さず、もう一方はアリストテレスのように特別に注目していました。しかし誰も現代の民主主義を疑っていませんでした。国民は統治しなければならないし、統治出来るかどうかを彼らが自問する時、国民は集まって議論して本当の共通の意見に一致して、殆どが議会で行われると理解しています。しかし、彼らは隠された選挙には備えていませんでした。

以上は、現代政治の慣習を特徴付けているものです。全ての人間が政治的に平等であるのか、選挙が人々の役に立っているのか、靴修理屋とか大工が政治家とか将軍に代わって判断を下す人になっているのか、以上は何世紀も議論されている民主主義の基本です。しかしその制度は本当に新しく、人は敢えて殆ど何も言いません。それ程その制度はまだ若く、結論そのものを出すにはまだ早過ぎるのは、隠された選挙があるからです。経験は殆ど何でもありません。その選挙は屢々、あらゆる些細なやり口で押しつけられ、驚かされ、監視されています。従って、昔からのやり口という力によって屢々、その隠された選挙は公然と認められた意見の結果になります。党派による一つの規律があります。事前に開催される集会が幾つかあり、それらは優柔不断な人々を良く引きづり込みます。政治的人間たちは、選挙の秘め事に対して恐らく十分に斟酌することがなければ、実際に闘っている党派の中ではより強い組織を望みません。そのことを知らずして恐らく、敢えて認められない意見を市民が支持することに、彼らは我慢出来ないように見えます。そして、この考えの中にもある真実があります。というのも、もしも権力が、ある人間の言いなりになる人々を彼の好みで投票させたり、脅して行動させたり出来ることが道徳に反するならば、欺瞞を通して給料を貰い続けるのと同様に、善でなくなるでしょう。そして予測出来ない選挙や未知の儘であることで、選挙の日にはこの長い奴隷状態に復讐するのでしょうか。人は可能性と共に元気になることが出来るのです。一人ひとりの市民は、政治行動に責任がなければなりません。

しかし、合理的な権力者も沢山おります。隠された選挙を久しい前から捨てるために、それを考慮していることも周知のことです。だんだんと隠された選挙は、惑星全体に国事を導いて行きます。そして私たちは、何も疑わないで理解するのです。あるいは子孫が理解するのであり、政治が完全に新しくなります。何故なら今までの政府は、直接にしろ間接にしろ、世論に沿った暴君による節度のない権力であったからです。しかし、基本的に我が国は騒ぎを求めていない世論が既に生まれているのを人は理解しています。何故なら、それが最終的に権力を確立しているからです。歴史を新しくして下さい。大衆の活動と隠された選挙の間には、次第にずれが大きくなって行きます。例えば代議士たちの殆どは、大新聞やお金持ちの横暴を我慢しているのは明白です。何故なら有権者がそれらを巻き上げる代わりに、彼らの票が公になって行くからです。この様にして〈新精神〉に関する例のデュピユイ(1)のように悪賢い人間は、我が国の実際の世論を完全に間違えることもあり得たのです。そして彼の後にも多くの人々がおります。

(一九一三年七月三日)

(1) 〈新精神〉はジャン・カジミール＝ペリエ内閣の時のスプユレ文部大臣が、一八九四年三月に話した言葉で、宗教的内実においては寛容という本当の精神が優先されることになる、というものであった。実際に彼が問題にしたのは、ジュール・フェリー内閣の政策であった積極的な政教分離政策の弱体化であった。シャルル・デュプイ（一八五一～一九二三）は、一八九三年から一八九九年まで首相に五回就いたが、一八九八年から一八九九年までのドレフュス事件の影響力を判断することが出来なかった。従って、反ドレフュス派や国家主義者の運動に加担して、第五次デュプイ内閣を倒すこととなった。

四十七 想像力による予想 (CROYANCES, PAR IMAGINATION)

私たちは少々どぎつい中傷を耳にする時、私たちと多くは関係のない話が問題であっても、信じる前に屢々調べます。しかし、その事柄が激しく私たちの心を乱すと、それと同じ心の動揺によって信じて仕舞っている自分に私は気付きました。まるでその事柄は十分に本当のこととして、私たちが受け取る強さによって証明されているかのようでした。例えばその話が決して私に狙いを定めていなかったとしても、誰かのせいにするのは悪意ある人の話であり、その人がしっかりしていたとしても私は疑います。私はその人の性格や本当らしさを斟酌します。結局のところ私は理性的です。何故なら私は勢いよく接しないからです。反対に、もしも私の耳に入る話が私に反対して酷く傷付けたとしたら、その怒りは少しも私に疑いを残しません。人間は、自分自身のためには大変な悪人になります。

そのことは観念と感情を何時も結びつける想像力の働きによって説明されます。何らかの危険を恐れるや否や、人はそれを信じます。それを信じて当然であるかどうかを、先ず知らなければなりません。その次に恐れます。そのことは、それだけでは良く分かりません。しかし怒りや憎しみにおいて私たちは、素直そのものです。そして私の耳に入る一言で私は苛立ち、最早調べられなくなります。そこから喧嘩や非難が生じ、今度は全く現実の言葉が多く生じます。そして、あなたが大変に早く非難する者は、彼の塔であなた自身よりももっと理性的に不平を言って嘆き苛立ちます。それ故に中傷は決して無くなりません。

私は、ナイフで二十回も刺された死体の悲惨な現場から、裁判官たちが証拠を示すのは難しくない、と話しているのを聞きました。証拠は二十もありました。この理屈は非常に滑稽です。しかし、戦争や祖国について燃えた理屈というのは少なからずあります。国家の危機という観念は、人間と馬が剣を駆り立てるように、証拠を駆り立てたのと入り交じった熱狂と恐怖と怒りを掻き立てます。戦争と侵略を見た者が信頼されます。しかし、それはメガホンが議論を深めると言われるかどうかということと殆ど同じ理屈です。同じ意味で、良く響く音響は拍手喝采を求める演説者にとって、つまらないものではないとプラトンは言いました。しかし人間の声の反響は、もっと適切に言うなら、より嘘つきであると言わなければなりません。それ故に、大声を上げて悲劇役者を演じている人間というものは、確かに軽蔑すべきです。

私としては新聞とポスターはこの世を変えたいと思います。眼は耳に勝ちます。古代人が戻って来ても理解するかどうか分からない二つの事柄があります。両眼によって読む読み方と、隠された選挙によって読む読み方です。多分、幾つもの断片で裁判官たちが裁く時が来るでしょうし、その時は被告も答え、手に持ったペンでも身を守るでしょう。そこでの世論は既に、耳よりも寧ろ両眼によって知識を得る程度になっています。そして私には最早、昔の巫女のように妄想の中で予想し決定するためのリーダーしか見えません。

(一九一三年七月十二日)

四十八 社会学者たち (SOCIOLOGUES)

精神を見失わないようにしましょう。純然たる社会学者たちの中には一種の狂信行為者がおります。彼はまるで現在、至る所で目立って来て、軽蔑され、激怒し、迫害する狂信行為が反映して来るようです。或る大物の社会学者は、例の道徳を思い出そうとしている哲学者たちに言いました、「私分からないのは残酷な人民ということだ」。人民の力と団結は市民の美德をその儘完全に明らかにしている、と私は言いたいのです。崇められた儀式に従って行われるのは、良いものであり称賛すべきものです。つまり個人における社会の圧力を示しているものですが、強制ではありません。少なくとも愛や信頼によるものです。この神聖なる暴君に意見とか行動で抵抗することは、全てが悪であり、非難すべきことです。何故なら、私は社会によって人間を明らかにするからで、貧困や弱さや動物的無知は含まれないとそれは説明していたからです。人間性を生むものは社会です。それが真の科学者の倫理というものの基本です。

社会学の父であり命名者であるオーギュスト・コントに遡って、もしもその根源に戻ってみるなら、全く別のものが見付かります。従って、彼は人間を社会によって明らかにしています。少なくとも彼は社会を〈人間性〉によって明らかにするのであり、それが間違いなく科学的方法になっていると私には思えます。というのも、事実における人間社会の特性とは思考にあるからです。つまりそれが本当の崇拜であり信仰であるからです。動物の社会は祖先に従って生きます。祖先の全てに従っています。そして本能は一種の過去への信仰です。批判的に思考することはなく、従って進歩をここで語ることも出来ません。内面の努力というものは、保存することに専念します。

人間社会の特性は、主観の継続というものです。ホメロスは主観的に存在しています。シェークスピアも同じです。デカルトも同じです。要するに、私たちは祖先を選択します。そして同時に社会は何人もの娘たちによって一人の精神的な娘になり、科学にしる芸術にしるそれらによって〈人間性〉が形づくられたものになるのです。

事実として、そして厳格な科学的見方として、如何なる人間社会もそれ自体としては十分ではありません。個人が決定され完成されるのは夫婦になるが如く、家族が決定され完成されるのは祖国である如く、祖国を決定し完成させるのは本当の〈人間性〉です。

確かにこの奥深いモラリストは、〈政治〉において地位の低い者が何時も地位の高い者を支えております。血と力が何時も地位の低い処から齎されることを良く理解しておりますし、熱心に教えていました。そして〈祖国〉は愛されていませんし、〈家族〉と同じように認識されるだけです。この様にして〈人間性〉も愛されていませんし、〈祖国〉と同じように認識されるだけです。それが社会学というものです。しかし、「死者たちが生者たちを支配する」と言う時に、最も偉大な死者たちの声を聞くのです。それは選択された死者たちであり、ギリシア人、ラテン人、ドイツ人、イタリア人、イギリス人であり、勿論フランス人です。従って、永遠の〈エリート〉によって〈人間性〉は、〈祖国〉が人間の家族というものを法によって築いているように、人間の祖国というものを法によって生者が築いているのが良く分かります。少々軽率に新し

い〈福音〉と受け取って大袈裟に言う人々の取り違えに対しても、私はこの素晴らしい考え方を
何度も要約します。

(一九一三年七月二六日)

四十九 恐怖と正義 (CRAINTE ET JUSTICE)

「正義は、大部分の人々において不正義を我慢するのを恐れることでしかない」。このヴォーヴナルグの言葉は大変に輝きを放っていますが、まさに深みがないと私は思います。もっと正確に言うなら、全てには真実ではありません。他人の不正義しか恐れなくて、自分自身のことは全然恐れない者は何時も不正義です。少なくともそれを目的としているとは言いませんが、行動が不正義なのです。その様な人間は大変に珍しく、私は今まで会ったことがないと付け加えて言います。

美德という畏敬する母の純真な教義によれば、もし死刑や他のリスクが取り除かれたなら、多くの人間が今も大工とか靴修理屋とか食料品屋とか弁護士とか裁判官として身を立てていると信じるべきですが、暗殺者として身を立てるのでしょうか。同様に、憲兵に取り巻かれた支配者がいなくなれば、人々は泥棒になるのでしょうか。私としてはそう理解しません。全然違います。

世の中を動かしているのは情熱であり、利益ではないと言わなければなりません。力が欲望に反対すると激化させて、大変に穏やかでなくなると言わなければなりません。というのも、それは情熱のゲームであり、戦争を起こすガソリンになるからです。あなたは迫害するや否や、狂信的になります。世論に逆らってみてください。あなたは暴力的になり、直ぐに不条理になります。傷口の包帯のように、怒りには脅しを当てるとは何という政治でしょう。この包帯は焼かれます。病人は体を自分で搔きます。あなたはそのことに激怒します。激怒した人間は、もう世の中に怖いものは何もありません。

子供の教育も同じです。もし子供から尊敬されたいなら、怒らなければならないと考えるのは余りに単純であり、取り返しがつかない間違いです。力を行使しなければならない場合、子供の手からナイフを取り上げなければならない場合、あるいは窓から身を投げるのを止めなければならない場合は幾つかあると私も敢えて言います。しかし、この保護の力は自然で本質的な美德のための障害を取り除くためのものでしかありません。諺に言うように、それは英知の始まりでしかありません。そして、その力に怒りとか憎しみという側面を与えたなら、全てが台無しになります。何故なら情熱は、情熱を模倣するからです。一度それに慎重になってあなたが友情を生ませるのは、少なくとも友情によるものです。反対に、もしもあなたの慎重さが恐怖からのものであったり、憎しみからのものであったりしたなら、その憎しみは伝染して、あなたが避けようと考えていることよりもっと大きな危険が生まれることになります。従って戦争の主要となる危険にとっては、憎悪もなく恐怖もなく結局のところ情熱もなく戦争を準備するのは全然分からないことになるのです。ドイツ人を怖がらせようとしているフランス人は、只それだけで最大の危険を引き起こしています。要するに、心の奥底にある平和を愛する心には、攻撃される恐怖があるというのは真実ではありません。恐怖、憎悪、激昂、挑発は全てが同じ血なのです。

(一九一三年七月二八日)

五十 ロマン・ロラン (ROMAIN ROLLAND)

私は昨日、『ジャン・クリストフ』の最終巻を再読しました。英知に基づいた死の美しい絵画をそこに見ますが、如何なる神話でもありません。主人公は、悲しみを乗り越え、何か美しい希望を創り出す必要もありません。生命の〈力〉は、生命そのものの法則によって死ぬのです。もっと適切に言うなら、それを受け入れるのです。それは生命を肯定することです。ヘーゲルの闇にも、それらの輝きが見付かります。要するに、死への積極的な概念は恐らく、私たちが想像力による神話を乗り越えたい時に私たちに最も欠けているものです。というのも、例えば禁欲主義者たちが最早人生を余り愛さない死に、大変良く準備しているからです。彼らは気取ることなくこの世を去りましたが、自殺することは死ぬことと全く別のことです。それは生きることを拒むことです。いや寧ろジャン・クリストフの死を再読して下さい。私が言うよりも良く分かります。

私は、その作家の肖像を何枚か見ました。どれも私には不満でした。画家と版画家は考えすぎます。彼らは、モデル以上のものを求めます。写真は余り解釈に適しません。言葉が絵を描けるのか私には分かりません。しかし、何時も人は試みることが出来ます。その人物は大変に大きく、腰も少し曲がっています。背後の首の関節は少し瘦せて、頭は上へ張り出しています。その点において類似のものには多くの重要な点があります。この姿をした人は、若者にはいないということです。髪の毛は細く、少し黄色い赤毛が美しく、白い肌に良く似合って申し分がありません。少なくとも生き生きとした血は真っ赤であるという、そんな予感がするに違いありません。額は広く、少し禿げ上がっていて、丸屋根に良く似ています。こめかみには沢山の髪があり、後ろへも全然削げておりません。美しい両眼は青いですが近視です。その輝きは緑色の鼻眼鏡が増大させています。人間の眼の観察家であるゲーテは、不正を齎すものに関しては全てが姿を現すまで、鼻眼鏡も眼鏡も見逃しません。私としては寧ろ他の目印を信用します。何故なら両眼は良く騙されるのを、私は気付いていたとと思っているからです。私の眼の前で見ているように思うこの顔で、最も心を打つ特色があるのは首です。長くて大変に細く、殆ど尖っているようで、すらりと伸びています。口は繊細そうで瑞々しいのですが、故意に微笑すると両端が下がり、大変に不快で嫌味な印象を与えています。しかしながら本当の微笑は素敵で、全く嫌味がありません。顎と顎先は強そうですが、荒々しくはありません。歯並びは良く見えませんが、下顎は良く締まっています。顔の下の方は、鼻と額が大きく占めています。顔全体には均斉の取れた力強さがあります。毅然とした印象を与えていて、自然であり、表現出来ません。ヴォルテールの大変有名な風貌は、何か観念的なものを与えますが精神的なものは少なく、もっと力強いです。私は、躊躇することなく決められるという特色しか、このロマン・ロランの顔に見ません。女性らしさは、絶対に何もありません。そこにあるのは男性らしさです。彼は曖昧な優美さも気取りも見せかけも決して見せない、と私は理解しています。この世の男たちに良くある好色的な態度は少しもなく、動物的な魅惑を暴いています。今は大変に喜劇的なことを何か書かねばなりません、それは聖職者や教授に少し似ている不自然でわざとらしい礼儀正しさです。しかし、もしも或る貴

族のような怒りに陥りながら銃を撃って罵る男であると分かったなら、直ぐにこの人物は非難されたことでしょう。長く時間はかかりません。

(一九一三年七月三十一日)

(次章へ続く)

五十一 戦争を容認するのか (ACCEPTER LA GUERRE)

多くの人々が今では戦争を容認しているのを知って、私は尻込みしています。そして、そこには平和であることを望む政治の成果があっても、戦争は絶えず最大の誤解の結果となり得ることでしかないのを肯定しています。従って人間たちは自然の雷雨のように、怒りそのものを考えており、それは自分の意志が奇妙な原因によって終始することになります。或る市民は熱心な顔をして言いました、「私は戦争に行かないが、もしも国民が戦争をしたなら、あなたは何を行いたいのでしょうか」。しかしながら、国民とは彼のことであり、あなたのことであり、私のことです。

反対に、何百万人ものフランス人が私のように考え、そして私のように言うのを仮定してみてください。「いいえ、そうではない。私はその考えを拒絶する。それらは如何なる計画でも欲望でも構わずに生まれるのを見ているのは、精神が弱いからである。まるで彼らは芝居の観客のようであった。罪の意識は彼にはない。私はそれを全身全霊をかけて否定する。そして反対に、私は何時も眼の前の調和と、心の平安と許しを手に入れている。実際にはそれはそんなにも美しくない。私は不機嫌になるし、腹も立てる。場合によっては一度ならず乱暴になるし、不公平にもなる。しかし私の精神は、何時も正義と英知の原則を守っている。以上のように、この世の人間の悪は、如何なる努力によっても制限されるのである。しかし、何によってであろうか。公的生活とは何であろうか。それは裏返しの世界である。風俗は穏やかである。国民の活動が熱狂とかパニックになるのは珍しいことである。二、三人の人間が怒鳴って我が国のドイツ人たちを侮辱したなら、冷静さを思い出させてくれるし、大衆は興奮することもなくそれに同意する。モロッコに関する交渉は怒りも恐怖もなかった。人々は良くそのことを言っていた。偉大なりヴァイアサンは元気である。紐の結び目を切ることなく、解いて解決する。しかし同時に羅針盤は狂っている。頭は混乱している。迫害狂が居座っている。野心のある気難しくなった人々が、季節毎に戦争を予測して十年になる。彼らの狂った考えは強く否定され、粉碎されなければならない。しかし反対に、彼らを迎え冠を被せたのである。賢者たちは、流行となったこの狂気を自らに与えないのを恥じている。今は、冷静でないことに人々は熱心である。最も大きな罪と狂気は、これからの避けられない事件と見做せば十分である。でも、それは間違っている。もしも現実には戦争になると信じるなら、それで十分に戦争が起きることになると考えてくれ。それ故に一人ひとり、大変に明白な義務として戦争を受諾することを、内部の意志によって今は否定し拒否することにあるのだ。戦争は現実ではないのだ。何故なら、私たちはそれを望まないからだ。告発しなければならない。この精神の錯乱を、光の中で引きずらなければならない。「私は狂うようになって感じている。そのことを実感している。そのことを知っている」とその人の顔は言っているのに、私たちは同情にも恐怖にも捉えていない。そして、もしも彼は反対のことを証明したいのだと思われたなら、彼は腹を立てるだろう。その様な人がいることに、私たちが怒るのは止めましょう」。

(一九一三年八月一日)

五十二 真珠 (PERLES)

三百万フランもする真珠のネックレスとは、正確には一体何を意味しているのでしょうか。言うべきことは簡単ではありません。想像力も迷います。金とか紙幣で三百万フランとは何でしょうか。それらは他人の労働による生産物への権利です。私が三百万フランを持っていることは、私がパンや葡萄酒やあらゆる生産物を持っていることであると言いたいのです。その代わりになる他の生産物を提供しなくても良いのです。私のお金は、全ての商店についての権利を私に与えます。交換というものに干渉する権利を私に与えますが、製品を交換するために製品を持って来るのではありません。生産することなく消費する権利で、それはお金の金額に相当するものです。百万長者が自分の穴倉に百万フランを隠して置いて貧乏人のように働けば、彼が作る靴や収穫する小麦で世界中が豊かになります。現金という宝物は埋めるか海で無くす度に、労働者たちにとっては利益になります。暇人たちが有利であるように、つまり生産しないで消費する人々が有利であるように働き続けていた労働者たちの労働の日々を、それは軽減するようなものになります。

もしも今、私の百万フランを埋めないで、あるいは水に沈めないで、百万フランの真珠を購入したなら、そのことは何を意味しているのでしょうか。私はここで、潜水夫、船頭、管理人、計量士、運送人、商人、倉庫業者という多くの労働者たちにお金を支払っていることになります。

そして、これらの全ての労働者たちは、遙かに遠い国からやって来て長く保管されて何度も取引された真珠のネックレスに結実する結果になりました。もしもお金持ちが全くいなかったなら、真珠を採る漁師も真珠の商人もいなくなるでしょう。つまりお金持ちが衣食住をする時は、彼らは他人の労働による多くの権利に止まっている人々なのです。

ですから私が真珠採りの漁師たちや真珠の商人たちを集めて、次のように言ったとします、「あなた方は真珠を探して集める代わりに、洋服を作り、家を建て、荒れた大地を開墾して小麦を生産しに行くのです。そして私は、あなた方の真珠を買う代わりに、それらを全て買います」。如何なる結果になるのでしょうか。私は自分のお金を使いますが、決して真珠を手に入れるのではなく、売ったり与えたりするための小麦や洋服や家を手に入れようになります。いずれにせよ、世の中に洋服や家やパンが不足する人々は少なくなるでしょうし、多くの真珠が海に取り残されることになります。

以上のことから、私が真珠を買うとするなら、洋服や小麦や家を破壊しているようなものです。お金とは、ネロが言ったようにローマを燃やす力です。私には百万フランで、二、三十万日相当の労働の日々があります。もしもそれらが失われ、真珠を探し、ダイヤモンドをカットし、自分の家系の跡を残すように命じたなら、私はまさに衣食住を燃やしているようなものです。真珠のネックレスは、燃えるローマと同種類の美しさを与えますが、灰で化粧されたものも、もっと長く一緒に続きます。

(一九一三年八月六日)

五十三 けちと浪費家 (L'AVARE ET LE PRODIGUE)

大部分の書物で、取分け風習についての書物は、その風習とは関係のない余所者たちによって書かれておりますが、彼らは自分たちの定義を私たちに押しつけます。そこからけち、気前の良い人、そして浪費家の概念のような勝手気儘なものが出て来ます。そして、そのことは財産の問題をより複雑にして、自然と大変分かり難くしています。多分、消費の推奨が将来において軽蔑されるのが、至る所で分かります。自分のお金を上手く活用する者をもっと公正に評価するようになるでしょうし、お金を守っている者も同じです。奴隷を買う権利を除いて、自分のお金を守って遣わないこととは何を意味するのでしょうか。

勿論、私はお金を貯め込んでいるけちと、ばらまいている浪費家との間にある矛盾を良く考えませんでした。それは大変に人為的で不自然です。浪費家の性格とは、現代の原則では激しい購買欲です。そして誰もが、ショー・ウィンドーで私たちが力を試そうとしているこの快活な感情を知っています。私は、お金を支払う音を聞きます。しかし盗みを働く者も同じ快感を手に入れますし、それらは何時も同じ情熱です。それは名誉からであろうと、正義心からであろうと、多少なりとも調整されます。それは何時も獲得し手に入れようとする情熱です。そして良識に叶った言葉を使うことで、けちと浪費家が似ていることも分からせてくれます。というのも、けちは獲得する情熱によって導かれますが、想像力を働かすことはありません。彼は財産をもっと良く調べます。その収集家は或る種類から他の種類への移行を良く強調します。何故なら彼はお金に関しては惜しげなく遣うからですが、絵画とかメダルにはけちです。根っからの浪費家は、じっくりと完遂する能力もなく収集します。彼を損をして転売するか、浪費します。けちは金貨とか株を収集します。私は、積極的なけちとは思考し計画する者であると理解しています。何故なら、けちには行き過ぎた慎重さ、疲労、あらゆる恐怖、体の弱さがあるからですが、ついには歳を取ってもけちの儘です。しかし、彼らのあらゆる楽しみは、価値のある品物について思うようになることです。従って、何らかの品物とか、何らかの場合には、浪費家がけちになるのも良く知られた逆説になっていきます。例えば優美で礼儀正しい女性は、巨額の買物をして高額チップを何時もやるものではありません。パリの御者たちはそのことを良く知っています。逆に自分の出費そのものがけちになる善良な人々がおります。浪費家たちの多くはお金を稼ぐことにも大変に熱心で、仕事にも厳格であることは特に注目しなければなりません。契約の時は百スーでも厳しく言う者が、二十フランの昼食をご馳走するようなものです。

男性の性格の多様性において最も軽薄な相違は屢々重要ではなく、意味もありません。しかし、実際の相違に触れると、類似点や繋がりを人は見ます。動物や植物に対してもそんな風です。鯨や牛の実際の相違点の研究は、類似点も分からせてくれます。ゲートルは、葉、萼片、花卉、雄蕊にある深い類似点を見つけた最初の人でした。若鶏の翼は、腕と手です。それを良く見る人は指も分かります。要するに同じものが自然に発達したのですが、状態と環境で変わります。同様に、けちな人と浪費家の行動を正確に語るなら、両者にも類似点があるのが分かります。というのも両者は共に彼らの能力を訓練するからです。そして、おべっか使いに門戸を開く人と、借

金癖のある人に門戸を開く人には、そんなにも相違がありません。二人とも諂った宮廷人的なのです。二人とも欲望に興奮するのが好きなのです。その上に、同情を駆り立てるあらゆるものを嫌います。しかし、前者は後者よりも、けちけちしてお金を支払います。

(一九一三年八月八日)

五十四 戦争の狂信者 (MYSTIQUE DE LA GUERRE)

民族主義者たちの活動は、個人では寒いか暑いかも自由にならない集団の熱病のようなものであると良く言われております。トルストイは、この集団の動きを鳥の移動と比較しようと望みました。かくして市民は休息や平穏や平和の時に、突然に一種のどうしようもない不快感に襲われます。個人的教養、理念、習慣は何も生みません。あらゆる国において最も教養のある人々は、最も熱く燃えている人々の中におります。そして最も美しい人生を始める者は、迷うことなくそれを火に投げ入れます。失っても些細なことしかない哀れな人間と同じなのです。結局のところ戦争は、最も崇高で人間として最も高度な役割を持っていると考えている全ての人間を導き、考えを変えるためには最高の効果がある狂った活動です。私が頑固に平和を説く時、何回次の様に言われたことでしょう。「戦争の風が吹いて来ているのに、あなたは他の人々のように逃げ回っているのだ」。称賛を含んでいれば、人は反論も容易に受け入れます。

戦争のこの狂信者というものは、私の眼には何もかも超えて恐ろしいものに見えます。何故でしょうか。何故なら人々はそれを信じ、そのことを承諾するのがまさしく物事の真実になって行くからです。自分は狂人であると信じると、人間はそうなります。そしてそれは情熱というものに批判的になる時で、その感情は抑え難いと口にするようになります。というのも抑え難いのを否定しながら、恐らく全く同じことを我慢することになるからです。それは苦しいことですが、私は何も分かりません。しかし、人が抵抗出来ないと言ったならば抵抗をしなくなることを、私は大変に良く分かっております。それは精神の眩暈です。何によっても人は倒れますし、確かに倒れるようになります。戦争は、この種の眩暈が齎すようです。それ故に平和という手堅い友人は、先ずこの眩暈を否定しなければなりません。彼の最高の義務、厳格な義務は、所謂社会学的な必然性である全ての力を否定することです。人間としての最大の誤りは、あらゆる情熱において次のように思うことです。「あゝ、私は何が出来るのか。巨大な自然の中の哀れな欠片なのだろうか」。

しかし否定した後、好戦的な妄想が病気のように広まるようになる本当の原因を理解することも有益です。事を始めるに、何時も怒鳴る人々がおります。そして彼らの実力は、静かにしている人々が臆病であると言っていることにあるのです。この矢は、ひりひりと傷む傷を作ります。患者は体を搔きます。それは何時も次のように、教養があつて寛大な人間には特に不愉快なものです。「私は、難しいことは何もやらない。全ての職業は危険で、私はそれらを他人に任せる。私は、屋根葺き職人ではない。決して医者でもないし、看護師でもない。私は水兵でもない。私は本を読み、ものを書き、熟考する。それは不具者の生活だ。臆病者でないのは確かなことなのだろうか」。この考えは最も賢明な人間には、多くの愚かさを生むこととなります。戦争とは、全く決闘のようなものです。思い切って出来ることを分からせるために、人は戦います。そのことは、最も穏やかなブルジョアたちを上品に刺激したなら、何故彼らが好戦的になるのかを説明しています。その代わりに、同じ様な悪口が労働者には少しも動揺を与えません。彼にとっての人生はもっと困難で、平和を愛するものです。何故なら彼らは自分は強いと感じているから

です。

(一九一三年八月十二日)

五十五 贅沢 (LE LUXE)

或る人が私に書いて来ました。「私は、実際に理解していませんが、贅沢な人々と貧乏な人々の関係について良く考えたいのです。しかし、事実上は何処へ導かれるのでしょうか」。

もしもその考えに従ったなら、奢侈に関する税に導きます。つまり贅沢な消費についての税です。少しも所得に関する税ではありません。お金持ちは、場所を移動するのにも簡単に車を利用します。所謂多くの労働者連中は働かされていますが、これらの同じ労働者とかその子供たちは上等な靴を履いていません。働く者たちが、その労働の代価に最も必要とする沢山の品物や裕福さを享受しない限り、贅沢に消費するのはけしからぬことです。立法者は、必要とする物の生産を奨励して、間接的に贅沢に限度を設けることを勧めることが出来ます。それ故に、如何なる利益もなく、例えば革製品や普通の靴の製造の仕事を改良するために急速に消費される使用人の収入が黒字でなければ、同じ方法で税を課す必要はありません。その結果は、贅沢な消費についての課税によって、間接的にしか成果を上げることが出来ません。

着想は、着想そのものによって働きかけることは出来ます。けちは大変に軽蔑されます。自発的に殆ど消費しない人間は、もしもお金を他人のために遣うなら、もっと効果的に多くのものを与えることを理解しなければなりません。というのも、貧しい人々のためにお金を投げ与えることは、何時も生産しないで消費する方法を与える証券を流通させていることであるからです。私が、私自身に私のお金を遣うとか、怠け者の乞食に与えることは、生産のために日々の労働を生まずに、何時も私は消費を増やすことになります。大部分のお金持ちは、頑としてその反対のことを信じていますが、それはお金持ちの義務は消費すること、車を一台ではなくて三台持つこと、街灯のを三個ではなくて百個持つことであり、結局のところ所謂お金を回転させることです。単純で質素な生活は余り評価されません。私は、皇帝の中庭が費用を捻出するために、良く賃借するのを耳にしました。多分、受け取ったものを返す百万長者は一人もいません。何故なら、大勢の料理人や御者や庭園管理人を使用しているからです。しかしながら、彼らには少なくともそれが唯一の楽しみであり、誇りに捧げる日々の労働です。ところで、もしも物価が高かったなら、必需品の生産は余り多くないのが主な原因です。生産品が多ければ、生産のために使われる労働の日数も多くなりますが、それは大地が生産するのではなくて、人間がそれを加工しているのです。

ダイヤモンドをカットしたり嵌め込んだりする労働者は、家に住み、服を着て、物を食べます。彼は自分の賃金を、家や服や肉や野菜に変えます。しかし、これらの物の生産には何の役にも立っていません。農民たちがダイヤモンドとか金を探し始めることを想像して下さい。小麦は足りなくなるでしょうし、野菜やバターや牛乳や卵も足りなくなります。誰もが食べなければなりませんから、非常に少なくなった物を手に入れようと争います。そして、金は豊富になりますが、物価が高くなります。私は、大変に稀にしか考えませんが、これらの関係を認識することは善行によるもっと適切な観念によって、風俗にも大きな変化を齎しているように思えます。

(一九一三年八月十七日)

五十六 魔法 (LA MAGIE)

〈魔法〉は言葉が齎します。顔の動きや動作を、言葉に自然と結びつけなければなりません。それらは表現力を生むのに役立ちます。〈魔法〉は表現が齎すとも言えます。事物についての話は、事物を良く描写しているか否かだけが大切です。しかし、人間たちに話したり、人間たちについての話は、主張するまでに至ります。彼らは長い間、間違い続けることはありません。もしも或る人がもう一人の人に「あなたは私を嫌っている。私は、あなたが私を嫌っているのを知っている」と言ったなら、もしそのことがまだ本当でないとしても、直ぐにそうなるでしょう。人は少なくとも今の自分を信じて表しながら、愚か者にならないようにすることだけは出来ます。冷笑は、馬鹿にされる人々を馬鹿にして仕舞うが、そのことが恐ろしいのです。そうです、馬鹿にされるのを恐れて、本当に馬鹿にされます。表情によって人は脅えます。家庭にも男や女の独裁者たちはおりますが、彼らは表情によって支配しております。命令したり、褒めたり、非難する方法によって支配しております。幾つかの顔付きには軽蔑が明らかに眼に見えますし、それは状況や性格によってはあなたに恥辱とか怒りを齎します。

狂気に対して犯して仕舞う最大の誤りは、狂っているとその人に理解させることであるのは知られています。多分、大部分の精神の病気は、周りの人の意見によって悪化します。というのも狂気の中で最悪の人は、自らを狂人と信じているからです。私は、彼が独りであり門外漢で〈狂人〉であるのを聞きますが、彼は人と違っていて門外漢であると言いたいからです。彼は拒絶され、身を引きます。

それは愛情という平凡な働きにおいても、より顕著な場合の一つに過ぎません。恋人になるのは、愛されていると自ら信じているからです。あなたが知性的な合図をすれば、あなたは知的になります。実際には、善悪の魔法の輪は幾つもあり、人々を永遠に閉じ込めます。

それらの情報の一つとして、キプリングはプルチネツラ・ベベという渾名をもった甘やかされた子供を書きましたが、彼は意地悪乳母の伯母や両親に育てられ、実際に呪いの言葉によって悪人になります。その復讐は演じられた感情の一つで、他人の話に従って一人ひとりの裡で大きくなります。誓いは誓いを呼びます。

娘が醜いことを繰り返し言われれば、彼女は醜くなります。というのも悲しみは醜く、臆病はぎこちないからです。そして太い皺が残ります。人間という植物は、好意的な意見の中でしか良く成長しません。そして、それ故に母の愛情は何時も正しいと言わねばなりません。愛情は信頼を生みます。愛情は美や知性を助け、更に多くの優しさを助けます。それは物事を解決し、申し分のない柔らかな新芽にして行きます。意地悪な見方をする眼は、ゼリーのようにならざるに枯らして仕舞います。

戦争は話し合いの結果です。ホメロスの『イリアッド』やその外の色々な作品において、侮辱の言葉は最初の砲弾になります。それ故に、好戦的な話し合いは何時も悪い影響を与えます。演説、脅迫的言動、挑発という恐ろしい賭けは、もしフランスやドイツの国民が国王よりも理性的でなかったなら、両国に広まって行くことになります。私は呪いや予言を恐れます。昔の魔術

師は、言葉でも事物を動かせると信じていることだけで間違っています。そして私たちは、善い魔法や友情の奇跡を習うべきです。

(一九一三年八月十九日)

ジャック・ボノムが代議士に言った話です、「いいえ、私はあなたに不満です。もしもあなたが子爵と同じ様になったなら、それはそれでよろしい。その者は出来そうもないことを決して約束しませんし、高い権威と下からの尊敬を望んでおります。誰もが運命を受け入れるのを望んでいます。強者と弱者、お金持ちと貧乏人は何時もいる、と彼は言います。その上、市町村議会の選挙以外は決して望んでいません。既に、十分監視されているとのことです。要するに、見せかけではないとするなら、代議士でなくなるまで代議士の肩書きを手に入れるのです。当然に、彼は露骨にそんなことを言いませんが、そう思っているのは分かっています。しかし、あなたは他の歌を歌っているのです。こちらにも農民がいて、あちらにも農民はいます。職業として最も美しく、最も役に立ち、最も尊敬されております。フランスは農民によって統治されているのです。農地の税は軽減されていますが、それで田舎にも人々が再び住むようになり、子供が十人もいる家庭を再び見るようになります。よろしい。でも、あなたは何を生んでいるのですか。兵舎での一年は、農地での仕事も結婚も出来なくなった一年です。それは、今の子供たちが都会に慣れて自分の家を忘れることよりも、無駄で良くない機会になっています。結局のところ、誰も私たちに賛成しないで話していました。パリの上流階級の男たちは、彼らの間の事柄を調整して決定していました。もし今でも子爵の王がいたなら、私たちにとっても打って付けです。彼は私たちの税や雑役をそんな風に取り除くでしょうし、主任司祭の聖歌隊のようにアーメンと言うだけです。私は、ミサを保証するために決してあなたを選出したのではありません。そのことを言うためです」。

その代議士は言いました、「しかし、あなたは同じことを百回も繰り返して言わなければならないのでしょうか。討議するのが重要ではありません。事態は私たちの指図を受けてはいません。ドイツは軍事力を強化しています。対抗しなければなりません。火事の時のように大急ぎで行かなければなりません。でも私としては、そんなことを聞いておりません。私は将軍ではありません。将軍は、十分な人間がいなくておられます。私たちは彼に任せます。一人ひとは配置に就いています。農民は耕作のことを判断します。政府が外国の危険、オーストリアの脅威、ロシアの狙いを判断するように、将軍は戦闘のことを判断します。それでも真の理由はまさに何時も秘密です。あなたは歴史を勉強しなければなりません」。

ジャック・ボノムは言いました、「まさしく、私は古いシャンソンに感謝します。全てがそうです。軍事同盟、大政治家、秘密、それらは国王の賭けです。昔の狩のように、野兎を追い詰めるために広野を略奪する時です。外交官たちは野兎を撃ちます。彼らは、少なくとも畑の収穫のことを考えません。もしも一方の人々が金額を決定し、他方の人々がお金を払うことが単に認められれば、何も言うべきことがないのは勿論です。十万人とか二十隻の軍艦とか五百機の戦闘機が既に求められているのに、私は何を言えるのでしょうか。彼らの計画に必要なでないのは何でしょうか。しかし、私は彼らの計画が少しも分からないのです。私が知っていることの全ては、政治家が自分には十分に権力があり重要で、自分の賭けには十分に勝てるとは考えていないこと

です。狩人は何時も犬をもう一匹欲しいと思い、農民は畑をもう一つ欲しいと思っています。そして政治家は、他人のお金で賭けます。よろしい、私は抵抗しなければならないと言います。そして、急進的な代議士であるあなたの役割は、自分の名前を名乗るように、新しい税や、私たちの頭上に降る新しい負担を阻止することです。しかし、それは余りに不可能で、あなたも自分の王国を生んでいるのです。〈農民になろう。黙ってお金を払わなければならない〉。そしてそれは私が、主任司祭や城と無縁になるためです。そのためには一方の人々からは私をパリ・コミュニケーション参加者と呼ばれ、他の人々からは平等主義者と呼ばれることです」。

(一九一三年八月二十日)

五十八 知性 (DE L' INTELLIGENCE)

知性とは正確に何でしょうか。この質問は抽象的で、贅沢な問題で、哲学者たちには良い質問のように見えます。でも、そうではありません。これは現実の問題です。毎日の問題です。男や女や子どものことが良く言われます、「彼は頭が良い」と。しかし、そこから言いたいのは何でしょうか。

文字通り言われる愚鈍という観念は、極めて明白です。それは無為のことでさえあります。それは付ける薬が無い程の退屈であったり、心を動かして奮起することが不可能な無関心さです。つまり無気力です。おまけに大変に珍しいものです。誰もが、何らかの精神の病気とは別の何かのことに関心があります。そして、関心があるものには、誰もが知的であると認めます。それは最早、この問題に一条の光になっています。

トランプのブリッジをして賭に負けている人々がおります。しかし、殆ど何時も彼らは自己満足で遊んでいるのであり、生き生きとした関心は持っておりません。しかし或る人々には、それが楽しいのであり、何時も賭に負けているとも言われています。多分、彼らは偶然による賭けの楽しみを探しているのであり、多くの人々にとっては大変に強いものです。多分、一枚のカードを抜き出す時に、一枚のカードを投げ捨てるのが楽しいのです。私にとっては、偶然にトランプとかチェスで遊ぶ時、二つの楽しみを混ぜ合わせているように思います。ある時は心の中を見抜き、予想するのが楽しく、そして計略で勝つのも楽しく、又ある時は空想に身を委ね、些細な危険を選択して、予見出来ない一連の出来事を引き起こして満足します。今は知性のある状態です。それが意志的であるのは極めて明白で、積極的な注意力によって表現されます。知性とは一種の勇氣です。

いや、そうではないと哲学者は言います。それは多少なりとも微妙なメカニズムです。腕時計はストップウォッチ以上のものに変化します。どんな人間も、もし少なくとも失敗したことや直接的な失敗に注意したいなら、それらを理解出来るようになります。しかし殆どの人間は、想像力で予見することが出来ませんが、チェスボードを見なくても、一手一手の読みの基本から五手先か六手先を読むことが出来ます。ところが努力することなく、この動きを驚くべき速さで行う人々がおります。彼らは、チェスの駒の動かし方を理解出来ています。私は、何千手も理解出来るようになるでしょう。大した苦勞も要りません。しかし、手順を理解するのに慣れるに依りて、私はもう頭が良くなっておりません。反対に、それはメカニズムでしかありません。優れた計算機のようなのです。知性ある人々はその時、数字の特性によって何らかに要約された方法を発見します。ロボットは大変早く実施しますし、殆ど考えません。現実にはチェスとか掛け算にあっては驚異的に行うことが出来ても、その他のことには殆ど愚鈍なのです。知性的であるとは、寧ろ纏れた糸を解くこと、試すこと、模索すること、間違えることです。デカルトは機械論を解明しながら、今のバカロレア合格者なら避ける些か大きな間違いを行いますし、それが本来の知性です。多分、精神にとって最も稀有な性質は、ある困難な問題を注意深く思考する能力であり、何年間も戦うことです。トランプ遊びをする男は、次のように言ってカードを捨てました。「

これは大変に簡単だ。馬鹿な奴らの知性さ」。

(一九一三年八月二四日)

五十九 二つの宗教 (DEUX RELIGIONS)

殆ど同じ言葉で、およそ同じ事柄を言う二つの宗教がありますが、はいといいえのように、対立しています。商売が上手でない人々がおりますが、彼らは他人からの負債を解決して、嫌々ながらも自分の責任を負います。それが可能になると、彼らは巨額の出費によって絶えず繰り返される苦痛から自分を慰めます。そして全く波のような希望を熱心に持ち続け、得になる仕事、運命の変化、ついには奇跡のことを話します。この幻想によって彼らは直ぐに幸せになります。大変正確に計算するのを気に入っている人々もおります。彼らは出費を抑え、商売を工夫し、算段を考えます。そして自由主義的な政治家であるジャック・ラフィット (1) のように、大地から一本のピンを拾うのです。そのような人々も直ぐに幸せになりますが、最も根拠が明白な希望によって、彼ら自身の強い信仰と事物へのはっきりとした見方を生んでいます。

そこには小さな二つの信仰があります。事件を期待する一種の宗教があります。それは浪費家のように、テーブルの上に財布の中味を全部出して自慢するのが一番好きなのです。それは雨や晴天のように、私たちが何も出来ない事柄には都合が良いのです。私は、一か月以上も少々遅い美しい夏を待っていました。そして私は、何度となく多く騙されたこの希望が些細なことのために舞い戻らないことに気付きました。しかし如何なる合理性もありません。雨が多く、曇りがちで寒い夏もあります。もっと遙かに良い者にも、天候でだんだんと難しい人間生活になるように決定的に変えることはない、と真面目に考える合理性は何もありません。だがその上更に、反対のことを仮定するのも、何ら不条理ではありません。そのことを私はここで疑っていますし、私の考えは多くの自己に倣っているのです。ところで、この広い世界や良い季節を全て信じないのも、何らかの不幸です。

その意味で、経験という長い連続の上に築かれた、本能による宗教があります。それはこの惑星の有為転変への適合でしかありません。しかし、私たちが希望の代わりに未来への確実なものを自分のものにするや否や、容易に絶望することになると思って下さい。一つの彗星とか千年という時間を待つことにおいて、何という不幸が世界にあることでしょうか。今の英知とは、無知であることを知ることです。そして、それは天文学者や気象学者でいることです。彼の学問とは、予言するのが禁じられております。従って何時も彼には、期待することが可能になっているのです。

もう一つの宗教は道德上の秩序です。少なくとも私たちの本来の活動に関係しています。それは一人ひとりにとっての小さな田舎や、自分自身をより良く統治することにあります。待つことと恐れることは、二つとも罪です。思い切ってやることと労働することに美徳があります。そして絶望は地獄の悪徳です。というのも、言うことを聞かない子供は何時も言うことを聞かずに、あるいはやるのが遅い子供は愚鈍な儘あるとか、不公平や権力は何時も人間の間支配していると考えるのは間違いであるからです。そして今の絶望には原因があると考えする必要があります。例えば、二つの国の国民が戦争を諦めて受け入れたなら、そうなるだろうと考える必要があります。それ故に、公平と平和を信じなければなりません。その上で継続して思考する者は、未来

の宗教の最高の形を発見するでしょう。

(一九一三年八月二八日)

(1) ジャック・ラフィット (一七六七～一八四四) は、軍人で政治家。フランス銀行総裁を務めた。

十三時、十四時、二十一時と言っても意味は何もありません。新しい表現に、恐らく意味を直ぐに見付ける人々はおります。私としては一時、二時、九時と直ぐに母語に翻訳し、そして直ぐにこの既知の言葉は一つの事柄、つまり文字盤上の針の位置が私に示すことになります。そして太陽の位置、食事の時間、黄昏など自然とそこに全てが結びつきます。しかし、新しい表現は殆ど不透明な儘です。私は一つの数字しか考えません。けれども私はその新語を覚えるのを愛していますし、夕方の八時を考える時には、二十時と言うのも愛しています。私はその数字を使いますが、何も際だった進歩がある訳ではありません。もしも私が実際に理解したいなら、何時も翻訳しなければなりません。

簡単な例としては、外国語を上手に理解させるようなものです。それは、私には何時も外国語です。手を尽くしてそれを克服しなければならない対象のようなものです。その代わりに私の本来の言葉は、全ての対象や観念を把握し操るための道具です。私の言葉は手のようなものです。私は、把握して手に取るのに議論しません。説明する時も決して議論しません。私の注意力は全てが事物に向けられます。言葉は自然の叫びのように出て来ます。作家も良いものは、鳥の歌と同じように自然で気取っていないものであると私は確信しています。線を引いて削除しません。全ての抹消線が示しているのは、他の言葉が書かれるということです。そして大部分のへぼ作家たちは、その気取った効果を沢山私に与えますが、彼らはポール・ブルジェ、モーリス・バレス、アナートル・フランスあるいはルナンの自然な間投詞さえも翻訳しているのです。一番微妙なのはサン＝デヴルモンです。私が午後の二時に考える時でも、絶対に十四時と言います。私の〈十四時〉は決して様式ではなく、メッキであり、あるいは中空の銅です。

人々はイタリアの作家ガブリエル・ダヌンジオに感動します。何故なら、結局のところイタリア語と同じようにフランス語も上手に書くからです。そのことが証明していることは、彼がフランス語よりもイタリア語を上手に書いていないことです。昔の優れた学生たちは、ラテン語の詩も上手に創りました。言葉を整えることは、忍耐の遊びのようなものです。私は昔、フロベールが好きでした。しかし、彼が時々一つの言葉の位置や、一つの文章の均衡を何日もかかって求めていたのを知った時、私は軽蔑しました。それは確かに不当でした。というのも彼は多分、自然な叫びを沢山探していたからです。少なくとも私が、もしも彼と〈文通〉していたなら、彼の自然な叫びもかなり醜いものであったと言わなければならないでしょう。スタンダードは決して訂正しませんでした。へぼ作家たちは、そのことを何も信じていません。しかし私の場合、純粋な即興以外のものは理解出来ません。「その文章をあなたは書き直したいのです。あなたは言いたいことを上手に言っていない」とあなたは言います。しかし、あなたは何を知っているのでしょうか。自然で正常な思考に従えば、そのことについての熟考で、今あなたに齎されたものは別の観念です。そして、その別の観念が今は新しい思考の芽を説明しなければならないのです。要するに、不足があれば壊すべきであり、訂正すべきではないと私は思います。もしもあなたが油で炒めたソテーが不味かったなら、その鹿肉を半分新しくして使うことは出来ません。全てやり

直さなければなりません。様式は探し求められます。しかし、〈文体〉は常に訂正が利きません
。

(一九一三年九月五日)

(次号へ続く)

一ノルマンディー人のプロポV

【2014年8月号】

<http://p.booklog.jp/book/86191>

著者：アラン （翻訳：高村昌憲）

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/86191>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/86191>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ